まえがき

本書は京都大学デザインスクールが編纂する最初のテキストです。内容をご覧になると，「デザイン」という言葉から思い浮かぶものと，イメージが違うと思われるかもしれません。このテキストでは，「デザイン」を意匠ではなく，広義の概念を意味するものとして用いています。たとえば，道路交通システムをデザインする，カリキュラムをデザインする，震災からの復興をデザインするなどです。また，本書では，特に断らない限り，「デザイン」と「設計」を区別していません。ニュアンスの違いはあるものも，「デザイン」も「設計」も広義のデザインに含まれるものと考えます。

私たちがデザイン学の議論を始めたのは，2011 年 3 月に開催した「デザインスクールのデザイン」ワークショップでした。情報学，機械工学，建築学を中心に，経営学や心理学など多様な専門領域の教員が集まり，小グループに分かれて討論を行いました。大学院生がその議論を 160 枚余のスライドにまとめています。それから数日後，わが国は東日本大震災に見舞われました。社会のシステムとアーキテクチャをデザインの対象とすることの重要性を改めて感じ，デザインスクールの設立を決意しました。

まず，異なる専門の教員・学生が協働するサマーデザインスクールを同年 9 月に試みました。テーマの内容は，教員の研究を演習化した本格的なもので，減災・復興，都市の再設計などの社会的課題や，高級寿司店のグローバル展開などの未来に向けての課題がありました。会場は 100 名近い参加者の熱気に溢れ，専門の違う多くの教員と学生が相互に学ぶ，新しい教育の形が生まれました。今では 250 名を超えるイベントに成長しています。京都大学デザインスクールがイメージされたのもこの時でした。

時期を同じくして，産業界を中心にデザインの重要さが見直されていました。技術が倍々で進歩しているときには，性能向上がユーザに新しい体験をもたらします。言い換えれば，性能向上が製品の成功を導く間は，研究者は技術革新に集中します。しかし，技術がある程度飽和すると，性能向上の速度が鈍り，ユーザの関心を得ることはできなくなります。そこで，ユーザの生活や心理に分け入り，新しい体験をデザインすることが必要となります。デザイン思考をビジネスに展開する企業も現れ始めました。

では，デザイン思考は大学の教育研究にどのような影響を与えるのでしょうか。先の議論の裏を返せば，技術革新が続いている専門領域では，教員も学生もデザインにかかわる必要性を感じません。技術が飽和しても，研究を志す学生はデザインに向かわず，進歩が期待できる新しい専門領域に移ってしまいます。わが国はオーバースペックの製品を作り過ぎているという指摘も聞こえます

が，こうした議論を，大学の教育研究にどのように反映すべきでしょうか。大学院生に研究の手を休めさせ，ユーザを理解するためのデザインリテラシー教育を受講させるのでしょうか。

インターネットと無線通信が地球の隅々まで覆い，世界中のあらゆる活動がネットワーク化され，相互に依存するようになりました。手のひらに載るスマートフォンをデザインするチームは，世界を覆うサービスプラットフォームを同時に考えなければなりません。つまり，製品をどう作るかではなく，またその製品単体がどう使われるかでもなく，社会のシステムやアーキテクチャをどうデザインするかが求められています。このように，デザインは異なる領域の専門家が協働すべき新たな課題となりました。

世界に目を転じると，これまでの技術では解決が困難な問題に溢れています。環境，資源，経済，人口，災害などは，どれをとっても個々の専門では解決できません。1 つの問題が他の多くの問題とかかわる複合的な課題に対応するには，異なる専門を理解し，自らの専門を深めると共に，異なる専門を理解し実践の場で協働ができる人材が必要です。つまり，深い専門に根ざしたデザインコンピテンシー教育が求められています。

京都大学デザインスクールは，5 年一貫の博士課程として，2013 年 4 月に開設されました。異なる専門を背景とする約 70 名の教員が教育に参加しています。本書は，その内の 30 名の協働によるテキストで，4 部 14 章からなります。デザイン学の基礎，方法，実践について解説し，最後にデザインスクールについて述べています。デザイン学は確立途上ですので，概論を書くのは時期尚早との指摘もありましたが，3 年間を通じて蓄積された知識や知見をまとめることも大学人の務めと考えました。どの学問も初期においては，さまざまにテキストが執筆され，やがてバイブルと呼ばれるテキストへと体系化されていきます。本書が，デザイン学におけるそうしたプロセスに貢献できればと思います。

本書の出版に当っては，執筆者をはじめ多くの方々に協力いただきました。特に各章を執筆いただいた方々には，全体としての整合性を保つために繰り返し修正をお願いしました。編者の力不足により出版が大幅に遅れましたが，共立出版には忍耐強くお付き合いいただきました。お世話になったすべての方々に，心から感謝いたします。

2016 年 3 月

石田　亨